

## 追悼



故 小林 收 先生 略歴  
(明治43年8月5日生—平成18年12月5日没)

### <学歴・職歴>

昭和11年 3月 京都帝国大学医学部卒業  
昭和11年 4月 京都帝国大学医学部副手  
昭和14年 6月 市立高松病院小児科医長  
昭和16年 2月 京都帝国大学医学部副手  
昭和16年 5月 京都帝国大学結核研究所助手  
昭和19年10月 京都帝国大学医学部講師  
昭和20年11月 三重県立医学専門学校講師  
昭和21年 1月 公立専門学校教授, 三重県立医学専門学校教授  
昭和21年 6月 医学博士  
昭和23年 3月 三重県立医科大学教授  
昭和27年 4月 三重県立大学教授  
昭和31年 6月 新潟大学教授  
昭和31年 7月 新潟大学, 新潟医科大学教授併任  
昭和32, 38年 2月 医師試験審議会委員  
昭和39年 8月 西独および米国出張 (文部科学省短期在外研究)  
昭和41年 3月 連合王国出張 (文部科学省短期在外研究)  
昭和41年 5月 新潟大学医学部附属看護学校長併任  
昭和42年11月 新潟大学医学部附属病院長併任  
新潟大学評議員併任, 大学設置審議会専門委員  
昭和43年 4月 米国出張 (文部科学省短期在外研究)  
昭和47年 2月 医療関係者審議会専門委員

昭和49年 8月 新潟大学医学部附属病院長事務代理  
昭和50年10月 富山医科薬科大学副学長, 新潟大学教授併任  
昭和51年 3月 新潟大学教授併任解除  
昭和51年 4月 新潟大学名誉教授  
昭和57年 4月 富山医科薬科大学名誉教授

### <主な役職>

昭和37年10月 昭和37年度日本小児保健学会会長  
昭和38年 9月 第15回北日本小児科学会会長  
昭和47年 9月 第24回北日本小児科学会会長  
昭和49年 9月 第17回日本腎臓病学会会長  
昭和50年 4月 第11回日本小児腎臓病研究会会長  
日本腎臓学会理事・名誉会員  
日本小児腎臓病研究会運営委員長・名誉会員  
日本小児科学会理事, 評議員  
日本アレルギー学会評議員  
日本小児保健学会理事, 評議員  
日本小児外科学会評議員  
日本癌治療学会評議員

### <叙勲, 叙位>

昭和58年春 勲二等瑞宝章 受章  
平成18年12月 5日 正四位 叙位

## 小児腎臓病学の泰斗 小林 収先生を偲んで

兵庫医科大学小児科教授

谷澤隆邦

小生が小林 収先生の訃告に接した期間は2年ほどでしたが、最後の弟子の一人として追悼文を捧げる機会を得ましたことを光栄に感じております。

先生が昭和31年に新潟大学へ教授として赴任された当時は、前任地の三重県立医科大学からの研究テーマであった小児の体温、基礎代謝率、副腎機能変化、アセトン血症などの研究を続け、新陳代謝、特に糖代謝に関連の深い内分泌系の研究に向かう予定であったと述懐しておられました。しかし、当時新潟大学医学部第二内科では木下康民教授のもとで本邦で初めて腎生検が行われ、そのことが腎臓病学へ一歩足を踏み出される大きな動機となったようです。赴任された翌年に和田博義先生(兵庫医科大学小児科名誉教授)と岡田敏夫先生(故 富山医科薬科大学小児科名誉教授)が入局され、それぞれ腎生検病理、尿蛋白分析、レノグラムの専門家であったことも幸運の一つであったと思われま

す。それまでは剖検例でしかみることのできなかった腎組織が得られるようになり多くの新事実が発見されました。急性糸球体腎炎の免疫沈着物、上皮下高電子沈着物、いわゆる hump が経過良好例では基底膜内に沈み込み、埋没 hump となって消失する、さらに、臨床的治癒、すなわち尿所見の消失から免疫蛍光抗体法での免疫沈着物の消失まで2~3カ月の時間的遅れが認められることを実証されました。現在では患者の同意を得ることは困難で、貴重な成績であります。また、臨床的には浮腫、乏尿、高血圧など急性腎炎症状を認めても、尿所見はないか軽微である例があります。しかし、溶連菌関連抗体が上昇し、別経路活性化の低補体血症が認められ、腎組織にても管内増殖病変を伴う一群を「腎外症候性急性糸球体腎炎」と報告されました。さらに、急性腎炎のなかで肉眼的血尿の持続と高度蛋白尿、あるいは乏尿の持続する重症遷延例の生検像で、比率は低いが半月体を伴うことがよくあることも本邦で初めて報告されました。現在ではよく理解されていることではありますが、情報の乏しい当時では途方もない努力と洞察力が必要であったことは論を待ちません。大著「小児腎臓病学、上下巻」(金原出版)は自験例と当時得られる文献を網羅した小児科腎臓病学のバイブルです。

アレルギー紫斑病性腎炎についての記載は当時ほとんどなく剖検例のみで、その詳細については小林先生が臨床像と腎病理組織像の詳細を集大成された著書「Henoch-Schölein 症候群と鑑別診断」(宇宙堂八木書店)に詳しく記載されました。Dr. Hamburger の腎臓病学教科書にも引用され、300例を超える症例数は世界最多であります。

地道な努力の成果が欧米でも評価され、ISKDC(国際小児腎臓病研究班：班長 Dr. Barnett)に日本からの代表委員として参画されました。アレルギー性紫斑病性腎炎、急性糸球体腎炎の成績が評価され、Dr. Kincaid-Smith, Dr. Vernier, Dr. Kimmelstiel らに認められたことが嬉しかったと述懐されておられます。そのなかで、特に臨床的研究成果に対する厳しき、継続の重要性を改めて学んだとのこと。ネフローゼ症候群のステロイド治療と腎組織像との関連、免疫抑制剤の azathioprine あるいは cyclophosphamide との併用療法の価値など、新潟大学からの例数が最多で、二重盲験法にて初めて客観性のある成績に大きく貢献されました。

日本小児腎臓病学会は今年で42回を数えますが、この学会の発足に高津忠夫教授(東京大学)、村上勝美教授(日本医科大学)らと尽力され、設置後は初代運営委員長として永年にわたって学会の発展に貢献されました。その一つが世界に例をみない学校検尿制度で、学校保健法の改正によって昭和49年から実施されております。その詳細は「学校検尿の進め方・考え方―検査の実際と事後管理―」(宇宙堂八木書店)に述べられております。

昭和42年の新潟大学医学部附属病院長時代は学生紛争の真っ盛りの頃で、その対応に心身ともにご苦労されたようです。「数学に王道なし」とよく書かれ、お好きな言葉のようでした。診療、研究にも同じことが言えます。数字にはめっぽう強く、発表統計で総計%が100に達しない、あるいは満たないことを即座に指摘され、計算機が内蔵されているようでありました。また、新潟大学に三部門で構成される腎研究施設が設置された原動力の一端を担われました。

昭和51年3月に新潟大学医学部教授を退官され、「小児糸球体疾患図譜」(宇宙堂八木書店)を上梓されました。新潟大学時代の集大成とも言える著書で、英語と和文の併記で発刊されました。また、記念品として文鎮を作られました。表には、新潟の地にふさわしい雪の結晶と稲穂。裏には「運根」と揮毫されておられました。運、鈍、根とすべきですが、特に鈍を省略した、と書いておられます。その真意はわかりませんが、労多くして功少ない、鈍重といわれることが衰退していくことへの警鐘、反面標語かもしれません。俳号は「小林児堂」とも書かれていらっしやいました。文学的な素養も十分に兼ね備えておられたことも想像に難くありませんが、明治の気骨のある方でしたので、人前では決して披瀝されないようでした。

昭和50年10月からは富山医科薬科大学副学長、附属病院長としてその設立に尽力されました。多忙な公務の間に小児尿路感染症研究班の成果として、「小児尿路感染症の臨床」(宇宙堂八木書店)を著わされました。

昭和57年に富山医科薬科大学を退官されてからは潔く一切の公職から身を引かれ、新潟市に戻られ、お弟子さんたちの来訪や季節ごとの食事会を楽しみに、奥様に先立たれてからはおひとり暮らしを最後まで通されました。しかし、小児科臨床に関する勉学は衰えることなく、古希を過ぎられてからも「小児科診療おぼえがき―50年の歩み―」(宇宙堂八木書店)、「小児科診療おぼえがき―その2―」を相次いで著わされました。まさに独立独歩、孤高の明治生まれの巨人でありました。

「継続は力なり」との信念で実証主義を貫かれ、「症例を積み重ねてから報告せよ」との姿勢は学問に間違いや訂正は許されない、誤報や曖昧な報告は学会から抹殺されその後評価されなくなる、と厳しく指導されました。一般臨床についてもカルテの記載、理学的所見の取り方についても同様な姿勢で臨まれ、実証主義に基づいたカルテ検閲、打聴診、触診指導は筆者自身にとっても有益でありましたし、医学生教育にも伝えたい姿勢です。

黄泉の国で奥様とご一緒に安らかに過ごされますようご冥福をお祈り申し上げます次第であります。合掌。